

よろこびの知らせ

—礼拝メッセージより—



10

よろこびの知らせ
第10集

目 次

弟子の覚悟	1
ルカ 9:23-27	
求めなさい	10
ルカ 11:9～13	
神の養い	19
ルカ 12:22-28	
わたしは良い牧者	28
ヨハネ 10:11-16	

ここに収められたメッセージは、2020年7～8月にテキサス州プレーノ市にある永楽長老教会の日本語礼拝で語られたものです。聖書箇所は“Gospel Project”に沿って選ばれており、聖句は新改訳聖書第二版より引用しています。

弟子の覚悟

ルカ 9:23-27

9:23 イエスは皆に言われた。「だれでもわたしについて来たいと思うなら、自分を捨て、日々自分の十字架を負って、わたしに従って来なさい。

9:24 自分のいのちを救おうと思う者はそれを失い、わたしのためにいのちを失う者は、それを救うのです。

9:25 人は、たとえ全世界を手に入れても、自分自身を失い、損じたら、何の益があるでしょうか。

9:26 だれでも、わたしとわたしのことばを恥じるなら、人の子もまた、自分と父と聖なる御使いの栄光を帯びてやって来るとき、その人を恥じます。

9:27 まことに、あなたがたに言います。ここに立っている人たちの中には、神の国を見るまで、決して死を味わわない人たちがいます。」

一、信仰と服従

きょうの主題は、もとのカリキュラムでは “Cost of Discipleship” (弟子となる代価) となっていました。この言葉が広く使われるようになったのは、ヒットラーに抵抗したドイツの牧師、ディートリヒ・ボンヘッフアーがそれを使ってからでした。『キリストに従う』という本の中で、彼はこう言っています。「人間は、＜信ずる者だけが従順である＞という命題を受け入れることによって、安価な恵みに毒されているのである。」ドイツは宗教改革者マルチン・ルターを生んだ国です。ルターは、「人はキリストの恵みにより、信仰によって救われる」という聖書の教えを再発見し、そのことを強調しまし

た。「罪ある人間が自分の善良さや、善行によって救われようとするのは、思い上がったことである。人が救われるのは、人の罪のために身代わりとなってくださったキリストの恵みを信じることだけによる。」これはドイツ人なら誰もが知っていることでした。ところが、ドイツのキリスト者は、「信じることは従うこと」という真理を忘れてしまいました。キリストへの信仰を教理の項目を頭で理解し受け入れることに、信仰の生活をキリスト教の形式を守ることにすり替えてしまったのです。キリストの恵みは、安楽椅子のようにそこに座り込むための「安っぽい恵み」ではないと、ボンヘッファーは教えました。

ボンフェッファーの時代、ヒットラーが政権を取ると、ドイツの90パーセントの人々は彼を英雄扱いして支持しました。人々は時代の波に乗せられてしまいました。教会は、いつの時代も、時代を導く光にならないののですが、その時のドイツの多くの教会はヒットラーと妥協し、外国への侵略とユダヤ人虐殺の片棒を担ぐことになってしまいました。そんな中で、ボンヘッファーは「信じるならば、第一歩を踏み出せ！ その第一歩がイエス・キリストに通ずるのである」と叫びました。彼は、人にそう教えただけでなく、大学教授の資格や約束された将来を捨てて、非合法の「告白教会」の牧師となりました。そして、ヒットラーのように自分を神とするような独裁者と信仰の闘いをしました。ただキリストにだけ従い続けるという道を歩きました。

イエスは人々に、自分の回りに群がる「ファン」になるだけでなく、どこまでも従い続ける「弟子」になることを求めました。「だれでもわたしについて来たいと思うなら、自分を捨て、日々自分の十字架を負って、わたしに従って来なさい。」（23節）ボンフェツファーが「信じることは従うことである」と言ったのは、このイエスの言葉に基づいていました。私たちも、キリストの弟子となり、キリストに従うことによって、キリストの恵みを、私たちを救い、支え、導く、本当に尊いもの、「高価な恵み」として保っていたいと思います。

二、十字架を負うことの意味

イエスの弟子になりたい。信仰が、たんに形だけのものではなく、実際の生活の中で生きて働くものであるようにと願う人は、「だれでもわたしについて来たいと思うなら、自分を捨て、日々自分の十字架を負って、わたしに従って来なさい」との言葉にこたえなければなりません。この言葉にこたえて行う実際の行動は、人それぞれによって違うでしょうが、すべての人に共通して求められていることや、誰もが覚えておかなければならないことがあります。

それは、まず、「十字架」とは「苦しみ」や「患難」とは同じではないということです。聖書に「患難が忍耐を生み出し、忍耐が練られた品性を生み出し、練られた品性が希望を生み出す」（ローマ 4:3-4）とあるように、人生の中で味わう様々な試練によって、人は神を求め、忍耐を学び、他の人を思いやる心を与えられ、成長して

いきます。ですから、「苦しみ」や「困難」には意味があり、目的があるのですが、それは、イエスがここで言っている「十字架」とは同じではありません。イエスは、十字架を自分から「進んで背負うもの」としていますが、人生の重荷は自分から進んで背負うものではありません。むしろ、イエスが「すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのところに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます」（マタイ 11:28）と言っているように、それはイエスのもとに下ろすものです。

「私はこの試練を十字架と思って背負います」「この苦しみは私の十字架です」という言葉を聞くことができますが、そうした人生の試練、苦しみは、きょうの箇所では教えられている意味での「十字架」ではありません。

次に、「十字架」は文字通りの、ローマ時代の処刑の道具だけを意味していません。十字架刑を受ける者は、自分でその十字架を背負って、刑場まで歩かせられましたが、ユダヤの人々は、総督がローマからやってきて、ユダヤの自治権が取り上げられて以来、そうした光景をあちらこちらで見てきただろうと思います。イエスが「十字架を背負う」ことを話したとき、弟子たちは文字通りの十字架を思い浮かべました。使徒たちをはじめ多くの弟子たちは、実際に十字架にかけられ殉教していきました。しかし、イエスは、この言葉を、直接の弟子だけでなく、十字架刑が過去のものとなる後の時代の弟子たちにも語っており、「日々自分の十字架を負って」と言っています。実際の十字架なら、そこで命が終わるわ

けですから、十字架を背負うのは一回限りで、「日々」という言葉は当てはまりません。イエスは「日々」という言葉を付け加えることによって、私たちに、実際の十字架とは別のものを教えようとしているのです。

では、それはいったい何なのでしょう。それを理解するには「十字架を負う」という言葉の前に「自分を捨て」という言葉があることに注意しなければなりません。原文のとおりに訳すと「自分を否定し、そして、十字架を取り上げよ」となります。「自分を否定する」という言葉と「十字架を取り上げる」という言葉が、「そして」で結ばれています。この場合の「そして」は、「つまり」とか「すなわち」という意味になります。「自分を否定する」と「十字架を取り上げる」は、それぞれ同じことを、別の言葉で言い換えたものということになります。「自分を否定する」という目に見えない行為が「十字架を背負う」という目に見える行為で言い表されているのです。

では、「自分を否定する」とはどういうことなのでしょう。どんなことでも遠慮をして自分を主張しないということなのでしょう。現代では「自己否定」という考え方は好まれません。人々の心の病の原因はすべて、自分を受け入れて欲しいという欲求が満たされないからであり、自分を「あるがまま」で受け入れればよいのだという考え方が支配的です。聖書には、神が私たちに「あるがまま」で受け入れてくださると言っている箇所があります。「放蕩息子」のたとえでは、父親は、落ち

ぶれ果てた息子のほうに、自分から走り寄って彼を抱きしめています。エリコの町では、イエスはザアカイというその町一番の嫌われ者の客となりました。「いさおなきわれを」という賛美は、英語では “Just as I am …” と歌われています。しかし、放蕩息子が父親のところに帰ってきたのは、彼がどん底まで行ったとき、自分の惨めな姿を見て、自分はこれではいけないのだと気づいたからでした（ルカ 15:17）。そして、父親のもとに帰ったとき彼は今までの彼ではなくなりました。晴れ着を着せてもらい、履物を履かせてもらい、息子のしるしである指輪をはめてもらい、彼は全く変わったのです（ルカ 15:22）。ザアカイもイエスを迎えた後、以前のザアカイではなくなりました。彼は、「財産の半分を貧しい人たちに施します。また、だれからでも、私がだまし取った物は、四倍にして返します」（ルカ 19:8）と誓いました。神の愛は私たちを「あるがまま」にしておきません。私たちが神が望んでおられる姿に造り変えるのです。生まれつきの罪の性質のまま、自己中心な思いのまままで生きることが、「あるがまま」だというのは間違っています。それは「あるがまま」ではなく、「わがまま」です。「いさおなきわれを」の賛美で “Just as I am …” というのは、「私は、自分で自分を肯定しません。キリストの恵みによって私を受け入れてください。私は、神が受け入れてくださったように自分を受け入れます」ということを言っているのです。

聖書が教える「自己否定」とは、キリストを知る前の

古い自分を死なせ、キリストにある新しい人として生きることです。それは、自分を神の手に任せ、神の思いのままに造り変えていただくことを意味しています。キリストを信じた者は、バプテスマによって古い人に死に、新しい人となりました。しかし、それですべてが終わったわけではありません。その「新しい人」は日々に新しくされ、形造られていかななくてはなりません。「日々十字架を負って」とあるとおりです。この「日々」という言葉には、「コンスタントに」「生涯にわたって」という意味があります。古い自分に死に、新しい自分に生きる、それは、バプテスマの日から始まり、生涯の間、一日も欠かすことなく続けられるものなのです。「自分を捨て、日々自分の十字架を負って、わたしに従って来なさい」との言葉は、そのような歩みへの招きなのです。

三、時代の中で

「日々」という言葉は、また、「時代」をも意味します。信仰者はそれぞれの時代に、それぞれの信仰の決断をして、キリストに従ってきました。そして、それが、新しい時代を切り開くものとなりました。ボンヘッファーにはアメリカに亡命して自分の命を救う機会がありました。実際、彼はニューヨークまで来たのですが、一ヶ月ただけで、ドイツに帰る決断をしました。その決断は、その時の感情や思いつきでなされた、軽率なものではありませんでした。彼は深く祈る人で、その決断は、神の前に出て、「何がキリストに従うことなのか」を問い詰めた結果でした。ボンヘッファーはアメリカを

去る時、こう言っています。「私は、故国のこの困難な時期を、ドイツのキリスト者と共に生き抜かねばなりません。もし私がこの時代の試練を同胞と分かち合うことをしなければ、私は、戦後のドイツにおけるキリスト教的生活の再建に参加する権利を持てなくなるでしょう。」それは1939年夏のことで、その年の9月、ドイツはポーランドを侵略し、第二次世界大戦が始まったのです。それからおよそ6年、1945年、停戦の直前4月にボンヘッファーは処刑され、彼が希望していた戦後ドイツの再建にかかわることはかないませんでした。しかし彼の目指したことは、同志たちに引き継がれ、ドイツは見事に復興しました。

今の時代は80年前の第二次世界大戦勃発の時と変わらないほど、大変困難な時代です。2020年になって、突然の「コロナ禍」によって私たちの生活は一変しました。この感染症のため、世界で1,200万人が感染し、半分の60万人が亡くなり、もう半分は回復ということですが、今も闘病中の方が多くいます。家族を失った人の悲しみ、仕事を失った人の労苦はどんなに大きいことでしょう。在宅勤務といっても、決して楽なものではなく、家族のための時間やプライベートな時間が削られ、かえってストレスが増えたと感じている人のほうが多いでしょう。精神的に不安定になった、家庭内暴力がひどくなったという訴えも増えています。

「コロナ禍」は経済に大きな打撃を与えました。中小企業は倒産し、町の商店は悲鳴をあげています。大企業

といえども収益が低下し、多くの従業員を解雇しなければならなくなりました。国家財政も圧迫されています。こうした経済活動の変化は、世界の政治に影響を与え、国と国との関係を損ね、力のバランスの崩れから、何が起こっても不思議ではない状況が生まれています。

この現実の中で、イエスを信じ、イエスに従うとはどうすることなのでしょう。私たちが払うべき「弟子の代価」は何なのでしょう。それは簡単には答の出ないことです。しかし、イエスの弟子でありたいと願ってする私たちひとりひとりの行動は、たとえ小さくても、「コロナ後」の世界を変えていくと信じます。「日々」という言葉には「日常」という意味もあります。この時代を見据えながらも、「日常」のひとつひとつを、イエスに従う者、キリストの弟子として実行していきたいと思えます。

(祈り)

父なる神さま、今、この時に「自分を否定し、十字架を取る」ことが何を意味するのか、それを私たちの日常でどう実行すればよいのか、なおも私たちに教えてください。そして、それを行う力をキリストの恵みによって与えてください。主イエスのお名前です。

求めなさい

ルカ 11:9～13

11:9 わたしは、あなたがたに言います。求めなさい。そうすれば与えられます。捜しなさい。そうすれば見つかります。たたきなさい。そうすれば開かれます。

11:10 だれであっても、求める者は受け、捜す者は見つけ出し、たたく者には開かれます。

11:11 あなたがたの中で、子どもが魚を下さいと言うときに、魚の代わりに蛇を与えるような父親が、いったいいるでしょうか。

11:12 卵を下さいと言うのに、だれが、さそりを与えるでしょう。

11:13 してみると、あなたがたも、悪い者ではあっても、自分の子どもには良い物を与えることを知っているのです。とすれば、なおのこと、天の父が、求める人たちに、どうして聖霊を下さないことがありますでしょう。」

一、熱心な求め

「求めよ、さらば与えられん。尋ねよ、さらば見出さん。門を叩け、さらば開かれん。」これは、聖書を読んだことのない人にも知られている有名な言葉です。イエスは、この言葉によって、どんな必要であれ、熱心に、また、確信をもって神に願い求めることを教えています。そして、そのことを教えるため、ふたつの「たとえ」を話しました。最初のたとえは 5-8 節に、次のたとえは 11-13 節にあります。ふたつのたとえは、「求めなさい。捜しなさい。たたきなさい」ということをはさみ込むようにして説明しているのです。

では、5-8 節にある最初のたとえから学んでみましょう。このたとえでは、ひとりの人と、その友人、それか

ら旅人が登場します。この人のところに、夜も更けてから、突然、旅人がやってきました。旅人は、その人の友達だったので、迎え入れて泊めてあげることにしました。聞いてみると、食事もしないで歩きづめで、やっとたどり着いたということでした。気の毒に思い、まず食べ物をあげようと思いました。ところが、ちょうどパンを切らしていませんでした。旅人を空腹のまま寝かせるわけにはいかなないので、この人は近所にいる自分の友達のところに行きました。ドアをたたいて、「君。パンを三つ貸してくれ。友人が旅の途中、私のうちへ来たのだが、出してやるものがないのだ」（6節）と頼みました。すると、家の中から返事が返ってきました。「めんどろをかけないでくれ。もう戸締まりもしてしまったし、子どもたちも私も寝ている。起きて、何かをやることはできない。」（7節）この人は、その返事を聞いても、あきらめず、しつこく頼み続けました。すると、彼の友達は、いったん断ったものの、うるさくて眠れないので、起き上がって台所からパンを探し出し、ドアをあけてその人に与えたというのです。

このたとえの中で、この人は、真夜中という最悪の時間に旅人を迎えました。自分の家にパンは残っていない。これからかまどに火をくべてパンを焼くわけにもいかない。まして町に買いに行くこともできないし、行ってもマーケットは開いていません。けれども、彼はあきらめませんでした。どこかにパンがないだろうか「捜し」ました。そして、パンのあるところを見つけまし

た。近所の友達のところへ。友達はもう戸締まりして寝てしまいましたが、この人はドアを「たたき」ました。いったん断られても「パンを貸してくれ」と「求め」続けました。そして、ついにパンを手にしたのです。「求めなさい。捜しなさい。たたきなさい」とあるように、この人は、文字通り、求めて、捜して、たたいて、必要なものを手に入れたのです。それは、非常識なほど、あつかましく、しつこく、強引でした。イエスが、こんな非常識な人物をたとえに登場させたのは、私たちが「常識の世界」に腰を下ろして、求めない先からあきらめてしまわないように、途中で祈るのをやめてしまわないように、熱心に祈るようにと教えるためでした。

同じようなことは、「やもめと不正な裁判官」のたとえ（ルカ 18:1-5）にも描かれています。何の力もないやもめでしたが、朝に夕に、熱心に裁判官に願ったので、弱い者の味方などしたことの無い「不正な」裁判官も、ついにやもめのために腰をあげたという話です。このたとえの最初には、「いつでも祈るべきであり、失望してはならないことを教えるために、イエスは彼らにたとえを話された」（ルカ 18:1）とあります。

私たちは、何かがないとき、足りないとき、すぐに「無い、足りない」といって慌てたり、不平を言ったりしがちです。そんなとき、イエスが「求めよ、捜せ、たたけ」と教えたことを思い返しましょう。「求め、捜し、たたく」は英語で、“Ask, Seek, Knock”ですが、

“Ask, Seek, Knock”の最初の文字を並べると“ASK”になります。“Ask”という言葉から、いつも、“Ask, Seek, Knock”の三つのことを思い起こすとよいでしょう。

“Ask”は、必要なものを「口」に出して願うこと、“Seek”は、何がほんとうに必要で、何が不必要なものかを「頭」と「心」を使って判断すること、“Knock”は「手」を使ってすることですから、実際の行動の指します。神に祈り、祈りの中で、みこころを知って知恵や導きを得、それに従って行動するのです。“Ask, Seek, Knock!”熱心に、また、忍耐して「求め、捜し、たたく」なら、必要は満たされ、なすべき方法を見出し、扉は開かれます。

二、天の父の愛

さて、最初のたとえでは、私たちが、どのように神に求めればよいのかが教えられていましたが、ふたつ目のたとえは、神が私たちの求めにどのように答えてくださるかを教えています。「あなたがたの中で、子どもが魚を下さいと言うときに、魚の代わりに蛇を与えるような父親が、いったいいるのでしょうか。卵を下さいと言うのに、だれが、さそりを与えるでしょう。してみると、あなたがたも、悪い者ではあっても、自分の子どもには良い物を与えることを知っているのです。」(11-13節)

「あなたがたも、悪い者ではあっても」の「悪い者」というのは強盗や泥棒のように他の人から物を奪うような者のことでしょう。そんな者でも、自分の子どもには良い物を与える。親がその子に進んで良い物を与えるのは

当然の事である。そのことを強調しているのです。

その上で、イエスは言いました。「とすれば、なおのこと、天の父が、求める人たちに、どうして聖霊を下さないことがあります。」（13節）私たち不完全な親でさえ、自分の子どもに出来る限りのことをしてやろうとするなら、天の父が、ご自分の子どもたちに最善のものをくださらないわけがないのです。私たちは、子どもに良い物を与えてやりたいと思っても、力がなくてしてあげられないことがあります。しかし、天の父には出来ないことはないのです。また、私たちは子どもの求めるまま、不必要なものまで与えて、子どもを駄目にしてしまうことがあります。また、それを与える時が早すぎたり、遅すぎたりして、子どものフラストレーションをふやしてしまうこともあります。しかし、天の父は、すべてをご存知のお方で、最善のものを、最良の時に、求める者に与えてくださるのです。

最初のたとえでは熱心な求めによって、必要なものが与えられると教えられていましたが、ふたつ目のたとえでは、私たちの必要が、神の「父」としての大きな愛に基づいて与えられることを教えています。求めるなら与えられ、捜すなら見出し、たたくなら開かれるのは、私たちの側の熱心さだけによるのではなく、神の大きな愛とあわれみによるのです。ここに、聖書の教えと他の思想や哲学、宗教との違いがあります。

さまざまな宗教では、多くの場合、神々や仏たちは、人間世界から遠く離れたところにおいて、人間にあまり興

味がなく、神仏のほうから人間に恵みを与えるようなことは、ほとんどありません。ですから、神仏に何かを願う時には、神々を人間のほうに振り向かせるため、必死になって努力しなければならないのです。神社で行う「お百度参り」などはまだ優しいもので、チベットなどでは、「五体倒地」といって、一歩進むたびに、全身を地面に投げ出して祈り、起き上がっては、また地面に倒れて祈るという儀式があります。身体中、傷だらけになりながら、願い事の成就を祈るのです。

現代の私たちは宗教から遠ざかっているように見えますが、じつは、宗教は形を変えて現代人の中に入ってきています。「ニュー・エージ」と呼ばれるものでは、深い瞑想に入ることによって宇宙と一体になり、人は求めるものを得ることができると教えます。また、ビジネスの研修などにも取り入れられている「積極思考」では、自分が欲しいと思うものを具体的に思い描き、それは必ず自分のものになると、自分に暗示をかけます。そして、自分が願う自分になることを動機にして活動するように教えます。「研修」とはいつでも、それはからだや頭脳の訓練、精神修養や心理学的な手法などを混ぜ合わせたひとつの宗教です。そして、そうした宗教には、愛の神がおられません。そこでは、必要なものを手に入れるのは、すべて人間の努力にかかっているのです。

しかし、イエスは言います。「あなたがたの父なる神は、あなたがたが願う前に、あなたがたに必要なものを知っておられるからです。」（マタイ 6:8）神は人

間の父親の愛以上の愛をもって、私たちに良いものを与えようと、待ち構えておられる。だから、私たちは天にある宝の倉庫のドアを「たたいて開けてもらい」、その宝の中から自分に必要なものを「捜して見つけ出し」、それを「求めて与えられる」のです。私たちが、イエス・キリストを信じることによって神の子どもとしていただき、神に愛され、神を愛するという愛の関係の中にとどまるなら、それを通して、私たちの必要のすべてが与えられるのです。神は、お金を入れると品物が出てくる「ベンダー・マシーン」のようなお方ではありません。こんなふうにしたら、願いが聞かれるなどといった魔法めいたものはありません。大切なのは、私たちが父なる神に信頼し、神の愛を信じることです。この信仰、信頼によって、私たちは「はたして与えられるのだろうか」などといった心配なしに、「必ず与えられる」という確信をもって神に願い求めることができるのです。

三、聖霊の賜物

イエスは、熱心に祈ることと、その祈りに答えてくださる神の愛を教えたのですが、その教えを「天の父が、求める人たちに、どうして聖霊を下さらないことがありますでしょう」という言葉で結んでいます。突然のようにして「聖霊」という言葉が出てきましたが、なぜでしょうか。それは、聖霊が、神がくださるものの中で、最高の賜物だからです。私たちにとって一番大切なものは命です。私たちは命を守り支えるため、衣食住の必要を満たすために懸命に働いています。けれども、私たちを生か

す命そのものである聖霊を持たなければ、目に見えるものをどんなに多く持っていて、それによつては、その人の人生は満たされない、生かされないのです。この世を生きるためには、知恵や力を必要としますが、聖霊は知恵と力の与え主です。どんな賜物よりも与え主のほうに優れているにきまっています。私たちは聖霊を持つことによつて、どんな賜物にも欠けることのない者となれるのです。人のたましいは神を慕いあえいでいます。神が共にいてくださらなければ、本当の平安も、喜びも持つことができません。「聖霊を持つ」とは、神ご自身である聖霊が人のたましいのうちに住んでくださることを言います。このことを「聖霊の内住」と言うのですが、私たちは聖霊を自分のうちに宿すことによつて、神が共にいてくださること、「神の臨在」を体験して、たましいの満たしを得るのです。また、聖霊はキリストの代わりに来てくださったお方ですから、聖霊によつて、今、ここで、イエス・キリストと共にいることができ、キリストの弟子となることができるのです。

神がベンダー・マシンのようなお方ではないように、「聖霊に満たされる」ことを、車にガソリンを「満タン」にするのようによつてははいけません。「聖霊の満たし」は、教え導いてくださる聖霊に謙虚に従うことや、私たちのうちにあつてとりなし、助けてくださる聖霊に自分を任せていくなどといった、聖霊との信頼の関係によつて与えられるものなのです。ご人格である聖霊は、「信頼」という人格の働きによつてだけ、受ける

ことができるのです。

聖書では、神が私たちに何かを命じられるときには、必ず、それを果たすことができる力が約束されています。聖書には約束の伴わない命令はありません。イエスは、私たちが弟子としてキリストに従うことができるすべてのものを備え、聖霊を与えると約束してから、私たちに「弟子となって従え」と言われるのです。

「求めなさい。捜しなさい。たたきなさい。」 “Ask, Seek, Knock!” 求める者は与えられ、捜す者は見出し、天の門をたたく者は開けてもらえます。その中にあるすべてのものを受けとることができるのです。聖書は「私たちすべてのために、ご自分の御子をさえ惜しまずに死に渡された方が、どうして、御子といっしょにすべてのものを、私たちに恵んでくださらないことがありましよう」（ローマ 8:32）と教えています。御子イエスをさえ、私たちに与え、聖霊をくださる神が、私たちの必要のすべてをお与えにならないはずがないのです。

（祈り）

父なる神さま、私たちの必要のすべてを、あなたに求めることを教えていただき、感謝します。あなたは、父としての大きな愛で神の子たちの求めに喜んで答えてくださいます。そのことを信じて、どんな時でも、あなたに私たちの必要のすべてを、さらに、聖霊をも祈り求めさせてください。主イエスのお名前です。

神の養い ルカ 12:22-28

12:22 それから弟子たちに言われた。「だから、わたしはあなたがたに言います。いのちのことで何を食べようかと心配したり、からだのことで何を着ようかと心配したりするのはやめなさい。

12:23 いのちは食べ物よりたいせつであり、からだは着物よりたいせつだからです。

12:24 鳥のことを考えてみなさい。蒔きもせず、刈り入れもせず、納屋も倉もありません。けれども、神が彼らを養っていています。あなたがたは、鳥よりも、はるかにすぐれたものです。

12:25 あなたがたのうちのだれが、心配したからといって、自分のいのちを少しでも延ばすことができますか。

12:26 こんな小さなことさえできないで、なぜほかのことまで心配するのですか。

12:27 ゆりの花のことを考えてみなさい。どうして育つのか。紡ぎもせず、織りもしないのです。しかし、わたしはあなたがたに言います。栄華を窮めたソロモンでさえ、このような花の一つほどにも着飾ってはいませんでした。

12:28 しかし、きょうは野にあつて、あすは炉に投げ込まれる草をさえ、神はこのように装ってくださるのです。ましてあなたがたには、どんなによくしてくださることでしょう。ああ、信仰の薄い人たち。

一、イエスのたとえ

イエスは、人々を教えるとき、よく「たとえ」を使いました。「たとえ」によって、ものごとをわかりやすく説明できるからです。私たちも「たとえば…」と行って、実例をあげて物事を説明されると、難しいことでも「なるほど」と納得できるようになります。それこそ

「たとえば…」ですが、日本の法律には「器物損壊罪」についてこう定義されています。「前3条に規定するもののほか、他人の物を損壊し、又は傷害した者は、3年以下の懲役又は30万円以下の罰金若しくは科料に処する。」

（刑法261条）けれども、これだけではよくわかりません。「ボールで遊んでいて過って人の家の窓ガラスを割ってしまったら」「オフィスで口論になり、椅子をけとぼしたら」どうなるでしょうか。過って窓ガラスを割った場合は、この罪には問われませんが、弁償する責任はあります。またけとぼした椅子が頑丈で、どこにも傷がついていなければ、「器物損壊」にはなりません。しかし、椅子が壊れ、持ち主が訴えた場合は、犯罪が成立する可能性があります。難しい法律も、事例をあげて説明してもらおうと、少しはわかりやすくなります。

同じようにイエスも、人への神の愛や世界に対する神の計画を、日常の事柄を使ってわかりやすく教えました。イエスは、農夫や漁師、羊飼いや主婦たちの日常生活を使って、神のみこころを目に見えるように描きました。イエスの「たとえ話」には金持ちや貧しい人、賢い人や愚かな人、主人やしもべ、善良な人や悪賢い人など、あらゆる人物が登場します。「たとえ話」とはいつでも、どれも人々が実際にあったこと、よく見聞きすることばかりで、とても現実的です。

きょうの箇所では、イエスは、「いのちを支え、からだを守ってくださるのは神である。神が私たちを養ってくださるのだから、食べ物や着物のこと、つまり、日々の

必要のことで心配するな」と教えています。しかし、いくら「心配するな」と言われても、心配や思い煩いの絶えないのが、私たちです。特に今は、「新型コロナウイルス」のことで、心配なことが何倍にもなりました。そんな私たちに、イエスは、神が、私たちのことを、どんなに心にかけてくださっているかを、身近な「空の鳥」「野の花」を「たとえ」に使って示したのです。このたとえは、誰もが見慣れている風景を使って、神の守り、支え、養いを描いています。

二、神の養い

このように、イエスのたとえ話は「言葉で描かれた絵」 “Word picture” です。絵は「鑑賞」するもので、「解説」するものではありません。ですから、このたとえを理解するには、礼拝の後、外に出たら、鳥を見つけ、花を見つめるのがいちばんよいのかもしれませんが。自然の中に身を置いて、神の言葉を思い見ることが、どんなに大きな祝福であるかを、皆さんも、よく知っていることでしょう。

「鳥のことを考えてみなさい」「ゆりの花のことを考えてみなさい」とある「考えてみる」と訳されている言葉（κατανοέω）は「見る」と訳すことができますが、たんに、「眺める」というだけでなく、「観察する」「気付く」「思いみる」などという意味があります。ですから、空の鳥、野の花を見る前に、この箇所が描いている「言葉の絵」を、少し詳しく「観察」してみたいと思います。

イエスは、この「たとえ」で「カラス」と「ゆり」を使っていますが、より一般的に「空の鳥」、「野の花」と言い換えてよいと思います。22節に「何を食べようかと心配したり、…何を着ようかと心配したりするのはやめなさい」とあるように、「空の鳥」は「食べ物」に、「野の花」は「着物」に関連して語られていることが分かります。

24節に、空の鳥は「蒔きもせず、刈り入れもせず」とありますがほんとうにそうです。鳥は、神が備えたものをついばんで生きています。「納屋も倉ありません」というのもそのとおりで、何日分もの食べ物を蓄えはしません。しかし、鳥は毎日エサに事欠くことはありません。神がそれを備えておられるからです。詩篇 147:8-9 にこうあります。「神は雲で天をおおい、地のために雨を備え、また、山々に草を生えさせ、獣に、また、鳴く鳥の子に食物を与える方。」詩篇 145:15-16 には「すべての目は、あなたを待ち望んでいます。あなたは時にかなって、彼らに食物を与えられます。あなたは御手を開き、すべての生けるものの願いを満たされます」とあります。

「野の花」も「紡ぎもせず、織りもしない」のですが、みごとな装いをしています。神が造った花の美しさに比べれば、人工のものはみな色あせて見えます。ソロモン王の時代に、イスラエルは物質的にいちばん栄えましたが、イエスは、「栄華を窮めたソロモンでさえ、このような花の一つほどにも着飾ってはいませんでした」

と言っています。野の花を美しく飾っておられるのは神です。

田畑を耕し、種を蒔き、刈り入れるのはどちらかといえば男性の仕事。糸を紡ぎ、布を織るのは多くの場合女性の仕事です。神は私たちに最小限ぎりぎりのものしかくださらないのではなく、豊かに与え、また、美しく装わせてくださいます。イエスは、このたとえば、男性にも女性にも、そのことを教えています。

私たちはよく言います。「現実の人生は不足ばかりで、イエスの言うようなものではない。」そうでしょうか。イエスは非現実的なことを語っているのでしょうか。いいえ、イエスの語っている満ち足りた美しい人生は存在するのです。神を信じ、キリストに従ってきた人たちはみな、人生の豊かさを味わい、その美しさを表しています。信仰者には、神の守り、支え、養いは確かな現実なのです。

三、人への愛

なぜ、人にこのような祝福が与えられるのでしょうか。それは、神が人を「鳥よりも、はるかにすぐれたもの」（24節）として造り、神の愛の対象とされたからです。神が、空の鳥や野の花さえ心にかけてくださるなら、人間のことは、なおのことです。ルカ 12:6-7に「五羽の雀はニアサリオンで売っているでしょう。そんな雀の一羽でも、神の御前には忘れられてはいません。…あなたがたは、たくさんの雀よりもすぐれた者です」とあるとおりです。ルカ 12:7には「それどころか、あなたが

たの頭の毛さえも、みな数えられています」とあります。私たちの髪の毛は、いちばん多い時で10万本もあるそうです。髪の毛は、絶えず生えたり抜けたりしていますので、誰も、その数を正確に数えることなどできません。けれども、神は私たちの髪の毛の数を数えて知っておられます。これは、神が私たちの人生と生活のすべてを、些細なことにといたるまで、いつしみの心で知っていてくださることを意味しています。神の愛は、なんと細やかで行き届いていることでしょうか。

神は、あらゆる造られたものをこえて、いと高く、聖なるお方です。神と人との間には、創造者と被造物という根本的な違いがあります。神は永遠で無限で変わらないお方ですが、私たちは一時的で有限で変わりゆく者です。そうであるのに、神は、その違いを乗り越えて、ご自分と人との間に人格のまじわりを結ぶために、人に、ご自分の性質の一部、聖さや義しさ、愛や真実、知恵や知識などを与えてくださいました。創世記1:27に「神はこのように、人をご自身のかたちに創造された」とある「神のかたち」とは、こうした神との共通の性質のことをいいます。

しかし人は、罪のために、この「神のかたち」を損なってしまいました。知恵や知識の一部は残りましたが、「聖さ」や「義しさ」、「愛」や「真実」などは、すぐに失われてしまいました。人類は知恵・知識を使って文明を築き上げ、社会を発展させてきました。けれども、それは必ずしも正しい発展ではありませんでした。

神を知る知恵と知識を失ったため、その他の分野の知恵・知識においても、それを正しく使うことができませんでした。そのため、地球環境を壊し、自らの健康を脅かし、社会の混乱を引き起こしてきました。それでも人は、自分の知恵や力にしがみついてきました。自分の人生や生活から神を締め出せば、なにもかも自分の力でやらなければなりません。そして、なにもかも自分の力でやろうとすれば、心配ごとが増え、あらゆることに思い煩って疲れ果ててしまうのです。

神は、そんな私たちが、もういちど「神のかたち」を回復するために、御子を人としてこの世に送って下さいました。神の御子が「人のかたち」をとることによって、人が「神のかたち」を取り戻すようにして下さったのです。イエス・キリストを信じることによって、私たちは神が私たちが造って下さった、本来の姿に立ち返ることができます。神の子どもとされ、神を「天の父」として信頼して生きる人生が与えられるのです。神の無い人生には心に喜びを与える鳥のさえずりもなく、私たちを楽しませてくれる、色とりどりに咲く花もありませんでした。それは空虚で、わびしいものでした。しかし、信仰を持った時から、鳥のさえずりに神の愛を覚え、野の花に神のいつくしみを感じることができる、満ち足りた人生が始まったのです。

空の鳥、野の花は、蒔きもせず、刈り入れもせず、紡ぎもせず、織りもしません。ただ神によって養われ、生かされています。だから、人間も、働かなくてよいとい

うわけではありません。人は勤勉に働くべきです。神は忠実に、勤勉に働く者に労働の実を与えてくださいます。しかし、いくら懸命に働いても、そこに神への信頼がなければ、不安と恐れに追い立てられます。労働の実を楽しむことができないのです。「信頼の中で働く。」それが、私たちに求められていることです。イエスはその模範です。イエスほど、朝早くから夜遅くまで、勤勉に忠実に働いた方はありません。しかも、イエスはその働きのすべてを父なる神への深い信頼にもとづいて行ったのです。イエスは、いつも、ご自分に注がれている父なる神の愛に満たされていました。この「たとえ」の最後で、イエスは、弟子たちに「ああ、信仰の薄い人たち」と言いましたが、弟子たちの中には、まだ、父なる神の愛が見えていない人がいたのでしょうか。しかし、イエスは、信仰が足りないからといって、その人を斥けはしません。「空の鳥を見なさい。野の花を見なさい。よく見て、考えなさい。神の愛が分かるようになり、神の愛が分かるようになれば、神への信頼が増してくる。神への信頼が増せば、恐れや不安が姿を消していく。神があなたのことを心配しておられる。だから、心配するのをやめて、神に信頼しよう」と、信仰の足らない者をも、信仰へと招いているのです（ペテロ第一 5:7 参照）。

菅野淳（かんの・じゅん）作詞、新垣壬敏（あらがき・つぐとし）作曲の「ごらんよ空の鳥を」という歌があります。

ご覧よ 空の鳥 野の白百合を

蒔きもせず 紡ぎもせずに 安らかに 生きる
こんなに小さな いのちにでさえ 心かける 父がいる
ご覧よ 空の雲 輝く虹を
地に恵みの 雨を降らせ 鮮やかに 映える
どんなに苦しい 悩みの日にも 希望を注ぐ 父がいる
友よ 友よ 今日も たたえて歌おう
すべての物に 染み通る 天の父の いくつしみを

この歌のように、「天の父」を仰いで、この一週を過ごしたいと思います。

(祈り)

父なる神さま、あなたのお造りなされた自然は、あなたの栄光と愛を私たちに語り伝えています。御言葉に導かれて、空の鳥、野の花の中にも、あなたのいくつしみを見ることができるよう、助けてください。私たちが、あなたの父としての愛で、どんなに愛されているかを、さらに知らせてください。そして、あなたへの信頼のうちに生きる日々を与えてください。主イエスのお名前です。

わたしは良い牧者

ヨハネ 10:11-16

10:11 わたしは、良い牧者です。良い牧者は羊のためにいのちを捨てます。

10:12 牧者でなく、また、羊の所有者でない雇い人は、狼が来るのを見ると、羊を置き去りにして、逃げて行きます。それで、狼は羊を奪い、また散らすのです。

10:13 それは、彼が雇い人であって、羊のことを心にかけていないからです。

10:14 わたしは良い牧者です。わたしはわたしのものを知っています。また、わたしのものは、わたしを知っています。

10:15 それは、父がわたしを知っておられ、わたしが父を知っていると同様です。また、わたしは羊のためにわたしのいのちを捨てます。

10:16 わたしにはまた、この囲いに属さないほかの羊があります。わたしはそれをも導かなければなりません。彼らはわたしの声に聞き従い、一つの群れ、ひとりの牧者となるのです。

イエスは、ヨハネの福音書で、7回、「わたしは…です」と言いました。「わたしはいのちのパンです。」

(6:48) 「わたしは、世の光です。」 (8:12) 「わたしは門です。」 (10:9) 「わたしは良い牧者です。」

(10:14) 「わたしは、よみがえりです。いのちです。」

(11:25) 「わたしが道であり、真理であり、いのちなのです。」 (14:6) そして、「わたしはまことのぶどうの木…です。」 (15:1) “I am …” で始まるので、“I AM verses” (IAM 聖句) と呼ばれています。

じつは、この七つの他に、“I am.” が使われている箇所が、もう2箇所あります。いままでの7箇所では「わたし

は命のパンです」や「わたしは世の光です」など、「わたしは…です」の中に、「いのちのパン」や「世の光」などという言葉が入っていました。英語では“I am …”のあとに、“bread of life”や“light of the world”という言葉が続いています。ところが、他の2箇所では、“I am”のあとに続く言葉がありません。“I am”だけで終わっています。ヨハネ 4:26 では「わたしがそれです」と訳されています。サマリヤの女が「私は、キリストと呼ばれるメシヤの来られることを知っています。その方が来られるときには、いっさいのことを私たちに知らせてくださるでしょう」と言ったのに対して、イエスは“I am”と言って、「わたしが、そのメシヤ、キリストです」と答えました。

ヨハネ 8:58 にも “I am” という言葉があつて、「わたしはいる」と訳されています。これは、イエスがユダヤの指導者たちとの論争の中で語った言葉です。イエスは、ユダヤ人であれ、異邦人であれ、誰もが罪を悔い改め、神に立ち返り、罪の赦しを受け、その中に生きなければならないと教えました。つまり、悔い改めと罪の赦しの福音を語りました。しかし、ユダヤの指導者たちは、「自分たちはアブラハムの子孫だから、そんな必要はない」と言って、イエスに反対しました。それで、イエスは、ご自分がアブラハムに勝る者であることを教えるため、「まことに、まことに、あなたがたに告げます。アブラハムが生まれる前から、わたしはいるのです」と言いました。この「わたしはいる」（“I am.”）と

という言葉は、神が、モーセに「わたしは、『わたしはある。』という者である」（出エジプト 3:14）と言って、ご自分を示された言葉、“I am that I am”に通じるものです。そのことを悟った反対者たちは、「イエスが自分を神と同一視して、神を冒瀆した」と言ってイエスを責め、石打にしようとなりました。

「わたしは…です」（“I am …”）というのは、ギリシャ語で“ἐγώ εἰμι”（エゴー・エイミイ）と言いますが、これは、それほどに重みのある言葉です。きょうは、「I AM 聖句」の中から「わたしは門です」（10:9）と、「わたしは良い牧者です」（10:14）のふたつをとりあげて学びましょう。

一、門

詩篇 23 篇に「主は私の羊飼いとあるように、聖書では神が「羊飼いと、神の民は「羊」にたとえられています。そして、羊が集められる牧場の「囲い」は「神の国」を指します。旧約時代、神殿は「神の国」の象徴でした。詩篇 100 篇は、このように言っています。

全地よ。主に向かって喜びの声をあげよ。

喜びをもって主に仕えよ。喜び歌いつつ御前に来たれ。

知れ。主こそ神。主が、私たちを造られた。

私たちは主のもの、主の民、その牧場の羊である。

感謝しつつ、主の門に、賛美しつつ、その大庭に、はいれ。

主に感謝し、御名をほめたたえよ。

主はいつくしみ深くその恵みはとこしえまで、

その真実は代々に至る。

この詩篇は、神の民が、神殿の門をくぐって、神を礼拝する姿を、羊が、囲いの中に集められる姿でたとえています。

門は「入り口」を意味します。羊が門を通過して囲いの中に入れられるように、私たちはイエス・キリストという門を通過して、神の国に入ります。イエスは天の御国の門、「入り口」なのです。イエスは「わたしが道であり、真理であり、いのちなのです。わたしを通してでなければ、だれひとり父のみもとに来ることはありません」（ヨハネ 14:6）と言われましたが、父なる神にいたる道の最後には門があります。そして、その道も、門も、イエスご自身です。「わたしを通してでなければ、だれひとり父のみもとに来ることはありません」とありますが、それは、言い替えれば「イエスという道を歩み、イエスという門をくぐるなら、かならず天の御国に入ることができる」ということです。「だれでも、わたしを通過してはいるなら、救われます。また安らかに出入りし、牧草を見つけます」（ヨハネ 10:9）と言われているとおりで、イエスは神の牧場への門、「入り口」です。ここから入る者は誰でも、神から来る平安や喜びにあずかることができるのです。

「門」はまた、「守り」を意味します。それは、羊が野原で夜を過ごすときの情景を思いうかべるとよく分かります。野原には、石を幾段か積んだ囲いがいくつか作られており、野原で夜を過ごすときには、羊飼いは、羊

をその囲いの中に入れます。その囲いには、羊が一匹づつ、通れるほどの入り口があるだけで、門はありません。それで、羊飼いは、羊をみな石の囲いの中に入れてしまうと、その入口に座って、自分自身が、門になるのです。羊飼いは、石の囲いの入り口で寝ずの番をして、羊を狙う他の動物から、羊を守ります。イエスは、そのように、身をもってご自分の羊を守ってくださる「門」なのです。イエスご自身が私たちを守る門となってくださる。これ以上に確かで安全、安心なことはありません。

二、良い羊飼い

次に、「わたしは、良い牧者です」（ヨハネ 10:11）という言葉について考えてみましょう。ここで「良い」という言葉が使われていることに注意しましょう。「良い牧者」というからには、「悪い牧者」もいるのです。聖書では、神に立てられた王や指導者たちは「牧者」と呼ばれていますが、旧約時代の多くの王たちや高官たちは、神のみこころを知らない愚かな「牧者」でした。総督や役人たちは人々を苦しめる悪い「牧者」でした。イエスの時代の祭司長、律法学者、長老たちも、みずから「牧者」として任じていましたが、神の民を間違った道に導き、迷わせ、弱らせるだけでした。

エゼキエル書 34 章には、「悪い牧者」たちへの叱責の言葉が書かれています。彼らは、「肥えた羊をほふるが、羊を養わない。弱った羊を強めず、病気のものをいやさず、傷ついたものを包まず、迷い出たものを連れ戻

さず、失われたものを捜さず、かえって力ずくと暴力で彼らを支配した」（エゼキエル 34:3-4）とあります。それで神は、こうした悪い牧者たちを斥け、ひとりの「良い牧者」を立てると言われました。「わたしは、彼らを牧するひとりの牧者、わたしのしもべダビデを起こす。彼は彼らを養い、彼らの牧者となる。」（エゼキエル 34:23）この「牧者」は「しもべダビデ」と呼ばれています。これは、神に愛され、神を愛したダビデ王のような「良い牧者」が遣わされるという約束です。

そして、この約束は、「ダビデの子」として来られた「まことの羊飼い」イエス・キリストによって成就しました。イエスが「わたしは良い牧者です」と言われたとき、それは、旧約の預言の成就を告げているのです。

「羊飼い」の仕事は、いわゆる、「3 K」と呼ばれる、「きつい、きたない、危険な」仕事でした。エレミヤ 43:12 に「彼は牧者が自分の着物のしらみをつぶすようにエジプトの国をつぶして、ここから無事に去って行こう」という言葉があります。この言葉から、羊の「しらみ」が自分に移るのも嫌がらず懸命に羊の世話をしている羊飼いの姿を垣間見ることができます。イエスもまた、そのような羊飼いになってくださいました。イエスは神の御子であるのに「人の子」となり、主であるのに「しもべ」となり、「きつい、きたない、危険な」仕事を引き受けてくださったのです。イザヤ 40:11 に「主は羊飼いのように、その群れを飼い、御腕に子羊を引き寄せ、ふところに抱き、乳を飲ませる羊を優しく導く」と

ありますが、まさに、イエスはそのような「良い牧者」となってくださいました。

この「良い牧者」に導かれる人生以上に幸いな人生はありません。私たちの人生にはさまざまな困難や労苦があります。水も草もない荒野があり、死の陰の谷もあります。嵐の日もあれば日照りの日もあります。しかし、「良い牧者」であるイエスはどんなときでも私たちと共にいて、私たちを導き、助けてくださいます。私たちの弱さを知り、支えてくださるのです。

三、命を捨てる牧者

「悪い羊飼い」はエゼキエル書にあったように、羊から奪い取る者、暴力で支配する者です。また、たんなる「雇い人」は、自分の身に危険が及ぶと羊を見捨てて逃げてしまいます。「牧者」としての責任感も、羊への愛情もないからです（ヨハネ 10:12-13）。しかし、良い牧者は、自分の身を危険にさらしてでも羊を守ります。11節に「良い牧者は羊のためにいのちを捨てます」とあるとおりです。イエスは、15節でも、「また、わたしは羊のためにわたしのいのちを捨てます」と言われました。これは、イエスの十字架の死を予告する言葉です。イエスは、私たちの罪や汚れ、背きや裏切り、また過ちのいっさいをご自分の身に引き受け、私たちが受けなければならない裁きを十字架の上で受け、それによって私たちを救ってくださいました。羊のようにさまよっていた私たちを、神の牧場に連れ戻してくださったのです。ペテロ第一 2:22-25 にこうあります。「キリストは罪を犯したこ

とがなく、その口に何の偽りも見いだされませんでした。ののしられても、ののしり返さず、苦しめられても、おどすことをせず、正しくさばかれる方にお任せになりました。そして自分から十字架の上で、私たちの罪をその身に負われました。それは、私たちが罪を離れ、義のために生きるためです。キリストの打ち傷のゆえに、あなたがたは、いやされたのです。あなたがたは、羊のようにさまよっていましたが、今は、自分のたましいの牧者であり監督者である方のもとに帰ったのです。」この箇所以上に、「わたしは、良い牧者です。良い牧者は羊のためにいのちを捨てます」というイエスの言葉を解き明かしている言葉はありません。

「良い牧者」であるイエスは、今も、神の牧場の外にいる羊、間違った道をさまよっている羊を心にかけておられます。16節でイエスはこう言っておられます。「わたしにはまた、この囲いに属さないほかの羊があります。わたしはそれをも導かなければなりません。彼らはわたしの声に聞き従い、一つの群れ、ひとりの牧者となるのです。」イエスは十字架にかかれる前にも、こう祈っています。「それは、父よ、あなたがわたしにおられ、わたしがあなたにるように、彼らがみな一つとなるためです。」（ヨハネ 17:21）イエスは、人々がみな、神に立ち返り、ひとりの「良い牧者」イエス・キリストのもとに一つになることを願い、祈っておられます。このイエスの願い、祈りを、私たちの願い、また祈りとしていきたいと思えます。

(祈り)

父なる神さま、聖書に約束されている通り、「良い牧者」であるイエス・キリストを送ってくださり、感謝します。イエスご自身が「わたしは門です」「わたしは良い牧者です」と言われました。ですから、私たちも「イエスは、私たちのために命さえも捧げて、天の御国への門となり、そこから入るものを導き、養ってくださる良い牧者です」と語ることができます。私たちの証しを用いて、より多くの方が、あなたの牧場の羊となることができますように。主イエスのお名前で祈ります。

大正時代に順調な発展を見せた日本のキリスト教会は、昭和になって、国家権力の支配と圧迫に直面しました。1931（昭和6）年、満州事変が起こり、翌年、1932年には「満州国」が設立されました。1933年、日本は国際連盟を脱退し、孤立化を進めていきました。同じ年、奄美大島のカトリック教会に迫害が起こり、教会堂が焼かれたり、壊されたりし、宣教師は追放され、信徒たちは村から追い出されました。1937年、無教会のキリスト者、矢内原忠雄は、軍部の侵略に反対したため、東京大学の教授職から追放されています。

1939（昭和14）年、宗教団体法が成立し、陸軍大将荒木貞夫が文部大臣となって、軍部が教育と宗教を統制することとなりました。政府は、神道、仏教、キリスト教をひとつにし、戦争に協力させようとしたのですが、日本の宗教はあくまでも神道であって、仏教やキリスト教は神道を補佐するものと考えられていたのです。実際、僧侶たち、牧師たちを神社で参拝させるようなこともしました。

太平洋戦争勃発の1941（昭和16）年、プロテスタントの諸教団は合同させられ、日本基督教団が出来、富田満が統理となり、教団を国家権力に追従させました。政府は、キリスト再臨の信仰が治安維持法に触れるというので、ホーリネス諸教会の百名、聖公会の40名の牧師たちを検挙しました。教団は、信仰を曲げなかった牧師たちを守るどころか、その人たちを除名しました。投獄された牧師たちの多くは獄中で亡くなりましたが、迫害を受けた牧師たちのうち、誰一人として信仰を捨てた者はありませんでした。

軍部は、キリスト再臨はもとより、キリストの復活さえも信仰箇条から取り除くよう要求しましたが、そのことは成りませんでした。



Penguin Club

www.penguinclub.net